私が幼児教育を志した頃(10)

津守　真

米国留学

一九五一年（昭和二十六年）、私は米国に留学した。日本は占領下にあり、米国に留学するのは極めて困難な時代だった。一九五〇年代初頭のアメリカは、黄金時代と言われたときで、敗戦直後の日本とは対照的だった。一ドルが三六〇円の時代で、私の父は私の志を励ましてくれて、勉学の生活には困らなかったが、渡航費を考えただけで米国留学など不可能だった。私が保育学を志したのは、この二十世紀の戦争と文化と世界の中でだった。いま人生の主要な時期を通り過ぎて考えるとき、私の生涯の導き手である神の大きな力とあらゆる機会がこのように仕向けたとしか思えない。

私が留学したのは、フルブライト留学生の制度ができる以前のことで、私は、前年にミネソタ州立大学児童研究所（Institute of Child Welfare）大学院より入学許可と授業料免除を得ていたが、当時は米国滞在中の生活保証がなければヴィザを貰えなかった。私が中学生の頃から私の家の家庭集会で聖書講義に来ておられた吉田隆吉牧師の親身な推薦があり、ミネソタ日本人教会牧師北川大輔先生とアルバータ・トンプソン夫人の尽力により、ファースト・コングリゲーショナル・チャーチ・オブ・ミネソタがスポンサーを引き受けて下さった。戦後直後の米国のキリスト教会には、戦争中に敵国だった国の青年の世話をしようというスピリットが生きていたことを私は後になって知った。

私は昭和二十五年秋より、新制大学となったばかりのお茶の水女子大学家政学部児童学科の非常勤講師になった。愛育研究所の、知恵遅れの幼児の特別保育室も軌道に乗ったばかりで、それを離れて外国に行くことにためらいもあったが、私はこの機会を自分の運命として受けようと決心した。飛行機ではなく、私は貨物船の客として渡航した。当時はそれが一番廉価な渡航法だった。十一月十四日、私の乗った飯野海運の「若島丸」は広島県の因島から出航した。因島に向かって出発するときには、東京駅まで、特別保育室の親子たちが見送りに来てくれた。私は恐らく船で米国に渡った最後の留学生だと思うので、そのことから私の留学体験を記そう。

日本の港を離れて

船の中にどらが響き渡った。出航の合図である。外国に行くことを身近に感じていなかった私の体中からさっと血がひくのを覚えた。船の中にまで送ってくれた母、妹、それから私の婚約者は船を降りなければならない。何分かの後に出る。船のボーイが、もう何分もありませんからゆっくりお別れ下さいと言って、部屋を出て行った。ボーイの声が外から聞こえた。「お時間でございます。早くお出にならないと、船が出帆致します」。私は皆を送って甲板に出た。船の汽笛が十一月の朝の空気を振って鳴り響いた。皆、駆け出すように船と陸とをつなぐ桟橋を渡って行った。最後の人が桟橋を渡りながらもう一度振り返った。私は思わず「危ない」と叫んだ。

桟橋は静かに上がり、船はドックを離れて音もなく動き出した。船員が忙しく甲板を走り回っていた。船のボーイが私のためにテープを陸に投げてくれた。そのテープがするするとのびて、陸の人の顔が次第に霞んで来た。私は陸から目を離すことができなかった。船はやがて岬をまわって、港は見えなかった。

船は半日瀬戸内海の静かな美しい海を東に進んだ。陽当たりの良い甲板に椅子を出して、私は別れて来た人達のことを思い出していた。やがて船は淡路島をめぐって大阪湾から紀伊水道を通り、潮岬を目の前に見て、太平洋に出た。二日目から船はひどく揺れ始めた。冬の北太平洋は荒れるので定評のある航路である。冬の荒海の夜、私

は幾晩もブリッジに出て海を眺めた。背丈よりも高い大波の上に船が乗るかと思うと、次には谷底のような波の間に船は落ちて行く。舳先は真っすぐに東へと向かっている。船のエンジンの音が絶え間無く耳の底をはなれない。潮風の中を行く船に絶えず塗るペンキの臭いが食欲を失わせる。客は私ひとりで、船長室の隣に個室をもらっていた。食事は船長と、一等航海士、機関長、パーサー、通信士、ドクターと一緒にする。船が揺れるとき、私の皿が船長の前に滑り、機関長の皿が私の前にきていて、そのときは皆で笑った。船はほとんど二週間揺れ続け、私はベッドの上で輾転反側する日夜を過ごした。このことは、航海に慣れた船員たちも同様らしく、皆その苦しい生活に耐えていた。一日も早く足の下が動かない大地に着くことを願う気持ちは皆に共通だった。通信士が、公海上では日本に電報を打てることを教えてくれてから、私は毎日家族と電報で俳句のやりとりをした。荒れに荒れた一週間の後に、私は次第に船の動揺に身を任せることを覚え、心も平静を取り戻して来た。晴れた夜には荒海の上に月を見ながら、出発前に倉橋先生から言われた「月は世界中どこから見ても同じだ」という言葉を思い出した。そして太平洋上の月を仰ぎながら、次第に未知の世界アメリカで始まろうとする冒険に心を向けた。そのとき心に決めたことは、これから来るべき世界に白紙の人間の心になって、自分のまわりに起こる事柄を素直にありのままに受けていこうということだった。太平洋の荒海を昼も夜もエンジンを唸らせ

て、遅いながらも絶えず進むうちに船はきっと目指すアメリカの港に着くのだろう。私も、歩みは遅くとも一日一日を過ごすうちに来るべき未知の生活を乗り切るだろう。ただ進むよりほかに道はない。

こんなことを考えて、二週間心の準備をできたことは、あっと言う間に飛行機で目的地に着いてしまう現代よりも恵まれていたと思う。この後、私は困難に出会うたびにしばしばあの荒海の上の日々を考えた。

初めて見るアメリカ

入港の一日前になると、船のマストのまわりに鴎が飛んでくる。波の間に静かにおりて、翼をたたんで浮かぶ。足が赤くて大きな目が可愛い。まだ見えないが近づいてきた陸からの使者である。

十一月二十八日、午前二時頃、眠っていた私を船長が起こしてくれた。「シアトルが見えますよ、ほら、あれです」と指さした。海の上から見るシアトルの港は宝石をちりばめたように、青い街灯の光、ネオンサインの赤や黄色が夜空に浮かんでいた。ゆっくりと静かな湾を入って行く船のブリッジに立って、私は未知の世界に想像をめぐらした。

シアトルの埠頭には、吉田牧師の紹介によるシアトル日本人教会のツァイ牧師が出

迎えて下さった。蔣介石の台湾国民政府から最近米国に逃れて来られた台湾出身の人である。その晩は、一九四七年二月二十八日の国民党政府による台湾独立運動弾圧の話を聞いた。当時の日本人は知らなかった話である。

十二月二日、シアトルからグレイト・ノーザン・レイルウエイに乗り、私はミネアポリスに向かった。現在と違って米国でも西部から中西部、東部に行くのには自動車よりも汽車が使われていた。汽車の中で二晩を過ごさねばならなかった。隣席の人は日本から帰ったばかりの米軍下士官だった。日本で見る占領軍のＧＩは特別の人だったが、ここではただの同乗者だったことに驚いた。ビールを飲もうと誘われたときには恐ろしく感じて断ると、それではコーヒーを飲もうと夜の車中の暗い通路を通って食堂車に案内してくれ、翌朝も朝食を共にした。親切な人だった。日本では四月にマッカーサー元帥が罷免されてリッジウエイに代わったところで、日本人というと皆がそのことを話題にした。

十二月四日、汽車はミネアポリスの駅に着いた。ホームで北川大輔先生の大きな手と、アルバータ・トンプソン夫人の笑顔に迎えられた。書類の上だけではなくて、私を実際に待ってくれた人がいたことを知って、長い旅の間私の心の奥に抱えていた心配がすっと消えた。翌日から私がひと月お世話になる家庭のことも話された。その後の家庭はまだ決まってないが、顔をみれば世話する人も出てくるだろうとのことだっ

た。

いまになってこのことを思うとき、北川先生とトンプソン夫人の共通の理念に支えられた友情とその度量の大きさに感心させられる。第二次世界大戦中、敵国人収容所のチャプレンだった北川先生は日本人であるが、戦後直ちにミネアポリス市長諮問委員会人種問題部会の委員長となり、同じ委員であったトンプソン夫人と苦労を共にしておられた。その後私のミネアポリス滞在中に次第に知ったのだが、北川先生は日本人一世の生活問題の世話をしながら、米兵と結婚した日本人女性、黒人やアメリカインディアンを親身に世話をしておられた。トンプソン夫人は米国のさまざまな人種（マイノリティ）の人々の住宅、就職問題から、留学生の世話に家族ぐるみでかかわっておられた。ミネアポリスは米国中西部（ミッドウエスト）ミネソタ州の州都で、南北戦争のときには奴隷反対運動の先頭に立ち、南部から多くの黒人がこの町に移ってきた。その進歩的な気風が一九五〇年代はじめのミネソタには生きていた。この二人の方がいなかったら私の米国留学はなかったと思う。最初から綿密な計画のもとになされたのではなく、いざとなれば自分たちが引き受ければいいという大雑把な大胆さがあったことを、これも後になって私は気が付いた。戦勝国も戦敗国も人間は皆同じだから、援助を必要としている人がいたら自分たちの出来ることをするのは当たり前ではないかという、当たり前でも実行は難しいことを気張らずにしておられ

た、普通の市民だった。

私の米国留学は、家庭を通して人と人が直接に知り合うことが世界平和の基礎であることを実地に学んだ一年十カ月だった。その間に私はなんと十三軒の家庭で一カ月ずつお世話になったのである。

米国の家庭―クラウンス家

夜八時、私は北川先生とトンプソン夫人に連れられて、これから一カ月泊まることになっているクラウンス家を訪ねた。

ドアをあけると、白髪のクラウンス夫人が両手をひろげて私を迎えてくださった。長身のクラウンス氏は後ろに静かな笑顔で立っていた。

クラウンス家の玄関を入るとすぐに目に付いたのはガラスのケースに入った大きな日本人形だった。クラウンス夫妻は日本の青年が来るというので四十年も前に伯父さんからもらったという日本人形を私のために屋根裏から出して飾っておいてくれたのだった。「あなたのお国の友達も待っていますよ」と言った。私は遠くに残して来た婚約者のことをすぐに思った。クラウンス夫人は間をおかずに、「私たちは、この間まで戦争をしていた敵国の青年を家に泊めたいと思い、トンプソン夫人の提案を聞いて直ちに応募したのです」と言った。続けて、「パールハーバー（真珠湾）を私共ア

メリカ人は忘れない」と言った。私は慣れない英語で一生懸命に何か言ったと思う。クラウンス夫人はつづけて「この日本人形は、戦争中も私たちは大事にしていたのですよ」と言い、私ももう一度つくづくとこの可愛い人形を眺めた。じきに私共の間の空気はなごやかになった。

「二階のベッドルームと、三階の屋根裏部屋と二部屋あいているから、あなたの好きな方を選んでくれ」と言って、案内された。二階の部屋の隣室には夫人の姉で寡婦になっている老婦人が住んでいた。私は迷わずに三階の屋根裏部屋を選んだ。廊下のドアをあけると急な階段がついている。小さな洗面台があり、小さな机の上にはラジオがおいてあった。夜おそくなってその部屋に落ち着いたとき、私は机の上に一冊の本を発見した。布製の英語版絵本の『かちかち山』だった。ありたけの日本のものを私のために取り出しておいた心遣いが身に沁みて感じられた。娘さんが学生時代に使っていた部屋とのことだった。

翌日からクラウンス家での生活が始まった。